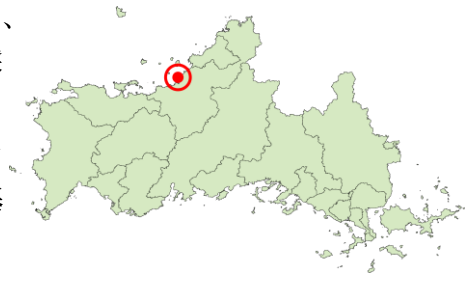
越ヶ浜地区について

越ヶ浜地区は、山口県北部の萩市の北東に位置し、日本で最も低い火山「笠山」と本土が砂州でつながった場所にある。

当地区は、古くから漁業が盛んで、延縄、定置網、一本釣り、カゴ、採介藻などが営まれている。また、このうち延縄漁は、フグやアマダイを対象とした日本最大の延縄漁船基地として全国に名を馳せる。

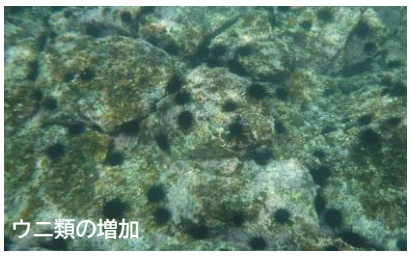


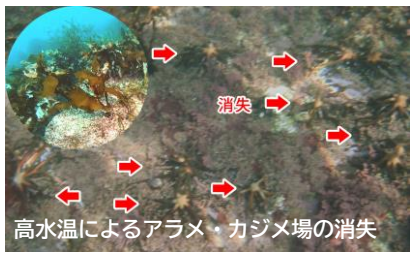
藻場の現況

当地区にある笠山の麓には、岩礁域が広がっており、アラメ・カジメ場やガラモ場が形成されている。また、これら藻場は、町の基幹産業である漁業の採介藻や一本釣りの重要な生産基盤となっている。

近年、水温上昇によるガンガゼの分布拡大やムラサキウニの増加、また、平成 25 年夏の猛暑による高水温の影響で多くの藻場が消失し、磯焼けが目立つようになってきた。

当地区における藻場の衰退は、磯根資源の減少につながり、沿岸で漁業を営む漁家の経営に大きく影響を及ぼすことから、その回復・維持は喫緊の課題となっている。また、少子高齢化が進行する当地区においては、将来を担う子どもたちのふるさとの海への関心、基幹産業である水産業への興味を喚起することも、大きな課題となっている。

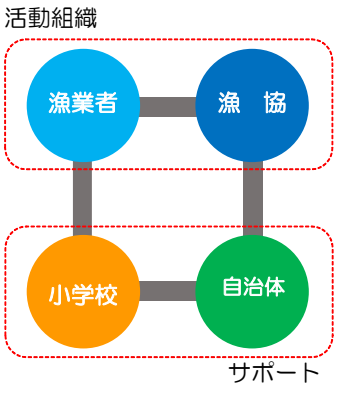




組織の設立および活動方針

上記の課題のもと、地区の漁業者が中心となり「越ヶ浜藻場保全グループ」を平成 25 年度に結成した。組織の体制は、漁業者と漁協で構成し、県の水産研究センターや水産事務所等のサポートを受け、活動を進めている。また、地元小学校と連携した取組も展開している。

活動方針は、藻場の減少が、夏期の高水温やウニ類の増加によるところが大きいことから、自分たちで取り組める以下の内容としている。



方針①　ウニ類の除去

ウニ類の分布が、高密度且つ広域に亘ることから、活動区域の全域でウニ類の除去活動を実施し、その密度の増加を抑制する。

方針②　アラメ母藻の設置

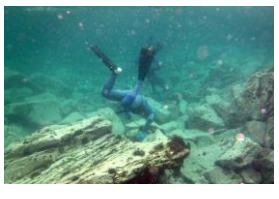
衰退したアラメ・カジメ場の再生を図るため、本種の母藻を設置し、種の供給不足を解消する。また、当取組を小学校児童と一緒に行い、ふるさとの海への関心を深める。

地先の海をまもり、子どもたちに伝える

（1）ウニ類の除去

ウニ類の除去は、その分布が高密且つ広域に亘るため、活動範囲の全域で 6 月～2 月にかけて 10 回行う。

除去は、海士（あま）約 20 人が素潜りで行い、手鈎でウニを砕く方法で実施している。1 回あたりの活動時間は、4 時間程度で、1 人 500 個程度を除去している。



（2）アラメ母藻の設置

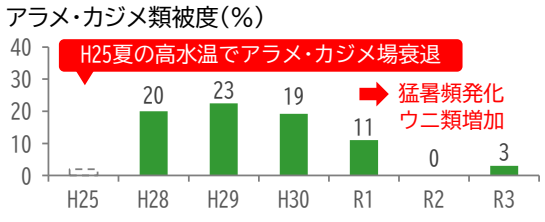
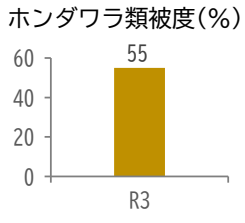
衰退したアラメ・カジメ場の再生を図るため、本種の母藻を設置し、その種を供給する。また、当取組を地元小学校と協働で行い、ふるさとの海や魚介類への興味を喚起する。

対象とする小学生児童は 5 年生で、総合学習の時間を使って実施する。

母藻は、現存するアラメ・カジメ場から成熟したアラメを採取し、利用する。設置方法は、藻場の教育学習で全国的に活用されている生分解性素材の「オープンスポアバック」で行う。

作業は、まず出前授業を行い、その後、「オープンスポアバック」を作成し、そして活動区域に母藻を設置する。出前授業では、漁業者にとっての藻場の役割やその保全に向けた取組について教える。また、オープンスポアバックの作成では、母藻を取り付けるだけでなく、自分たちのふるさとの海に対する想いや絵を描いてもらうことにしている。

活動の成果と課題

平成 25 年度に大きく衰退したアラメ・カジメ場の回復・維持を目的に、保全活動を実施した結果、平成 30 年度頃までは、一定の被度で藻場を回復・維持させることができた。しかし、平成元年以降、夏場の高水温が頻発化したり、ウニ類が顕著に増加したりするなどの影響で、ホンダワラ類へのダメージは少ないが、アラメ・カジメ場が再び衰退している。

また、小学生児童と協働で進めてきた母藻の設置が、アラメが顕著に減少したことや、新型コロナウィルス感染症の予防対策等から令和元年度以降、実施できていない。アラメ・カジメ場における種不足を解消、また子どもたちへの普及啓発を継続させるためにも、母藻の入手方法や小学校との連携の再構築を図る必要がある。